

【第12回日本伝道協議会主題講演】

## 対話路線を越えて

—21世紀の教団の形成と伝道—

小 島 誠 志

日本基督教団は、1941年6月に創立をしました。プロテスタント三十余の諸教派が一つに集まったといわれています。それ以前から諸教派が合同するという動きは当然あったわけですが、この年、1941年（昭和16年）に一気に合同にこぎ着けたのは、おそらく日米戦争を直前にした、国の政策と無関係ではなかっただろうと思います。四国教区には教団の戦時中に出した通達類がたくさん残っておりまして、現在『教団史』というものが出ていますが、あの中にも四国教区からコピーしたものもずいぶん含まれています。その通達を、私が宣教研究委員をしておりました時に、読んだことがあります。もう30年近く前のことです。その中にいろいろな書類があって、「合同感謝献金がなかなか目標に達しない、だからもう少しがんばって欲しい」（昭和18年）とか、「飛行機献納献金のお願い」がありました。昭和19年になりました時に、四国教区のある牧師（高知教会霜越牧師）がこの飛行機献納献金をに関して教区議長にはがきを出し、「教団の合同（感謝）献金が目標に達していないのに、飛行機献納献金は難しい」と記しています。

当然のことながら教団は苦しい時代でした。信徒はどんどんいなくなります。当時東京の教会で牧会されていたある牧師がこう書いています。「毎週毎週ガタッ、ガタッと（信徒が）いなくなる」。その他に、おそらくは国の政策として、教会の中に「貯蓄組合」をつくることが要求されました。組合長は牧師です。そして教会員に貯蓄することをアピールしていたようです。国がお金が必要なこととつながっていたようです。

戦局が行き詰まりまして、あちこちから「玉砕」というような報道が伝えられるようになりました。(玉砕ってそこでみんな死ぬことです。若い人向けに念のため)。その頃になりますと教団からこういう通達が来ています。「死生観の超克を教えるように」。これは文部省の背後からの圧力があったようです。また、昭和19年の終わり頃であります、満州への移民を各教区から目標を示して集めてほしいという通達が来ています。

要するに教団は、合同したのですが、戦時状況に対応することに忙しく、教会を形成するとかそういうことをほとんど行えない状況だったようです。その中で私の心に残ったことがあります。それは、昭和19年になっても教団が小さな教会のために補助金を送っていたことです。通達が出ているのです。大変感銘を受けました。昭和19年という年がどういう年か分かるからです。20年まで続いたかどうかは分かりません。

それからもう一つ、「教会学校の子どもたちに贈る皆勤賞と精勤賞を贈りたいので、バッジを送るためのお金を送るように」ということを戦争の終わり頃までやっています。つまりこれは、教団の教育委員会がぎりぎりまで一生懸命、そういう努力をしていたということです。そういう意味で、教団は戦時中に、ただ情勢に翻弄されていたということだけではなく、真に律儀にねばり強く、教団としてつながりをつくっていかうという努力も行われているのです。

1945年に敗戦をもって戦争が終わります。日本全体を縛っていたたがが突然はずれました。アメリカから進駐軍がやってきました。その時に、私も持っておりますけれども、向こうで印刷された文語訳の新約聖書がたくさん日本で配られました。そういう状況、自由と混沌の時代、その中で聖書が配られた。教会は大きな解放感を持ってこの時代を迎えたと思います。そして、教団を離脱する教派も、少しずつ、やがて次々と出てきました。私の牧会する松山番町教会は旧メソジスト教会ですが、戦争の終わった後しばらくして、四国や関西の有力な牧師が数人集まって、教団に残るかどうか議論しております。私の教会の牧師は、教団創立時より四国の教区長をしていましたが、教団を離脱すべきだという主張をしております。しかしその意見は容れられず、メソジストは

## 対話路線を越えて

教団に残るようになります。おそらく同じようなことが各教派において起こったと思います。自然に残った教派などなかったと思います。みんな議論したと思います。そして祈り、決断して残った。この時の決断は昭和16年の時の決断よりももうちょっと自由な形での決断だったと思います。

しかし、離脱する教派もかなりあります。ホーリネスの一部、バプテスト、ルーテル、改革派など。理念によって離脱した教派もあります。しかし経済的な理由、外国のミッションボードとの関係で離脱していった教派もありました。しかし、教団にとってもっともショッキングな出来事でありましたのは、旧日本基督教会の一部が離脱したことであります。1951年4月。この時は一部の離脱でしたが、当時の人は、これをきっかけに旧日基はみんな出ていくのではないかという恐れを持ったと思います。これは教団の重大な核になる一つの教派でありましたので、このことは大きなショックを日本基督教団に与えました。

そのことが直接の関係になったというわけではないと思いますが、しかしそのことが一つの促しになって、教団は信仰告白を制定します。1954年、第8回教団総会。これを決議するに当たり、いくつか意見がありました。教団の執行部側というか、これを支えてきた人々はこう言いました。「信仰告白という性格上、満場一致をもって可決してほしい」。しかし、「まだ時期が早いのではないか」という、教団形成をともにするようになって日が浅いという理解から来る時期尚早論がありました。それから、旧組合教会の牧師たちから、さまざまなためらう意見が出ました。たとえば、「明文化された信仰告白を持つことに苦痛を感じずる教会に対する配慮と見通しについてどう考えるか」という質問が出されました。同じような気持ちを旧組合系の方は持ったと思います。しかし最終的に同じ組合系の岸本貞次牧師の発言がありました。「多少の意見の違いはあっても将来完全に一致する教団になるように十分な配慮と努力を献げるようにしたい」。おそらくこの発言が旧組合系の人を一応なだめるという感じになったのだと思います。信仰告白を制定したけれども、意見はいろいろある。将来の一致に向けて努力していこう、そういう志であります。

ご存じのように、組合教会は各個教会が信仰告白の主体という考え方があっ

て、全体教会で信仰告白を制定するということになじみにくかったということがあると思います。そういう意味では教団は今でも信仰告白を全体教会の告白として受け止める、そのためのプロセスを踏み続けていると言えるのではないかと思います。教団として、伝道を、喜んで意欲を持って協力して前進させるためには、信仰告白を共通のベースにするということは不可欠のことです。そのところを十分に抑えきれないままに教団はこのところまで来てしまったと私には思えるのであります。そこに今日の教団の限界と課題があると思います。

その後日本基督教団は、当時の日本のキリスト教ブームに乗りまして（「乗っかる」というと悪いように聞こえますが、私もその時だったら同じことをしたと思います）、特別伝道集会、賀川豊彦の集会、スタンレー・ジョーンズの集会…、いろいろなことをやりました。次から次へと講師を派遣して、日本中を回りました。つまり、キリスト教ブームが急に目の前に現れたものですから、ここでもまた日本基督教団がどこで一致するかということを本当に議論する場所を失っていたと思います。時期はその議論をするのにふさわしい好期でした。しかし、その好機を逸しました。ある意味で一生懸命やったとは言えるのですが…。

その後少しはしりまして1967年まで飛びますが、当時の鈴木正久教団議長の名によりまして、「第二次大戦下における戦争責任の告白」が発表されます。これは、教団議長名で出されたというところにその意味と限界があったと思います。常議員会みんなが賛成したというところにはならなかった。議長が出すということを認めた。1967年のイースターのことです。これは、第二次大戦下におけるアジアに対する日本の加害責任、さらにそれをとどめることが出来ず、加担してしまった教団の責任を表明したものです。大きな議論が起きました。私はまだ神学校を卒業して2年目だったと思いますが、この告白の是非をめぐる議論が起きました。「一体教団がその責任を表明できるほどの主体性を持っているか」という意見と、その他方で戦責告白を支持する意見がありました。これこそ教団のなすべき告白だと。不幸なことでありますが、教団

## 対話路線を越えて

信仰告白に対して一定の距離を持つ人々、あるいはネガティブな反応を示す人の多くが鈴木議長の出した告白を熱烈に支持する傾向にありました。ある教区は「信仰告白」といわず、「戦責告白に基づいて教会形成をするのだ」というようなことを言いました。信仰告白と戦責告白を対立的にとらえられる傾向は今も教団の流れの中に生きていると思います。そしてその戦責告白の延長線上でいろいろなことが決議されたと思います。一つは沖縄キリスト教団との合同が行われました。これは、この告白の2年後であります、明らかにこの告白の実りとしてなされたという面があったと思います。それから10年後の「合同のとらえなおし」。これもおそらくは戦責告白の流れの中でなされたのではないかと思います。それを主に担った方は鈴木正久氏の弟子たちであったことを思います。

そして60年代から70年代の混乱の渦の中に教団は巻き込まれていきます。万博キリスト教館出展問題に端を発しまして、東神大の紛争もありました。問題はあちこちに飛び火しました。その全てを取り上げることはいたしませんし、出来ません。今日の教団の伝道という主題に即して考えたいと思いますが、この30年の紛争の渦中で言われたことは「宣教論」ということでありました。教会がこの時代の中で社会で果たす役割は何かということを考えるのが「宣教論」というわけであります。ここで日本基督教団は一致できるのではないかと、という主張です。ですから1960年に出されました「社会活動基本方針」のとらえなおしのような話しも宣教委員会で行われます。実際には実りがありませんでしたが。

そして、宣教論が言われ始めた頃から教団の中で使われだした言葉が「教会が問われている」「問われている教会」というフレーズであり、それは今もつづいています。誰に問われているのか。社会に、であり、時代に、であり、少数者から、であります。教団の集まりに行くときたび「教会は問われている」という言葉を聞くのです。私はまだ若かったものですから、非常に胸が圧迫される思いがいたしました。答えられないからです。教会がみずから生きる基盤を曖昧にしたまま、信仰告白を不明にしたまま、何を問われたって答えられる

はずがないからです。教会とはキリストに問われる存在だと思います。キリストに問われてその問いに答えていくという中で教会は生きるのだと思います。宣教論で教団をまとめようとしたその試みはある意味でこの30年の混迷を深めていった側面であったと思っています。もっと教団は基本的なところに共通の土台を据えなければならなかった。しかしそれをしないで「教会・教団は問われているのだ」と言われ続けてきました。

宣教論という言葉が横行すればするほど「伝道論」という言葉は抑えられていきます。伝道、と言うと「それは教会の自己拡張・自己目的ではないか」と言うのです。キリストの教会を形成するというのが「教会の自己目的だ」、と言うのです。教会はこの世のためにある教会ではないのか、と言うのです。そういう意味で伝道という言葉が教団というレベルでは冷笑される時代が続きました。各教区でも修養会で伝道という言葉が使われなくなっていました。恐ろしいことです。自然にそういう流れになっていきました。

ですから第31総会において「教団は21世紀に伝道の使命に全力を尽くす」という決議が行われましたが、伝道は全くキリスト教会として当たり前のことです。しかしこの決議をするということそのものに、大きな、画期的な意味があったと思います。私たち三役が選ばれ、あの決議がなされた。教団に新しい時が始まった一つのしるしではなかったかと私は思います。あの伝道決議がなされたということの背後にあるものは、もちろん人々の理念が変わったということもあるでしょう。しかし混迷の30年の混乱のつけがひたひたと諸教会の足元に迫ってきているという事実があったと思います。単純に言っても財政が逼迫してきた。各個教会の財政が逼迫してきました。ここ数年、各個教会はほとんどゼロシーリングで推移しています。そして教区・教団もそうです。これにはもちろん不況という背景もあるでしょう。しかし何よりも大きいのは、教団の信徒の方々の年齢構成であります。信徒のほぼ半分は60歳以上の方々です。つまり、普通に考えれば退職して年金をもらっている方々が半分だということです。今日、教団の礼拝（出席者）は決して少なくなっているとはいえません。決して落ちてはいません。ちょっと減りかけたかなというところもありますが、毎週

## 対話路線を越えて

6 万人出席しています。教会員の数は20万人です。しかし、5 年先、10年先のことを考えるとこれは深刻です。50パーセント以上が60歳を越えているのです。これで10年経ったらどうなるのか。どんどん新しい人が洗礼を受ければ別です。しかし今の状況でそんな楽観は出来ません。厳しいです。前に議長のメッセージの中で申し上げました。1950年代、教団は一年間に 1 万人の受洗者が与えられました。1990年代、教団の年間受洗者平均は2000人前後です。2000人を切っている年が2, 3 年あります。教会学校の出席平均は毎週10万人でした。現在は2 万人です。5 分の1です。子どもが減っているということだけではないと思います。ですから、いろいろな議論はあるけれども、多くの信徒はこのままではいけないと身にしみて感じていると思います。伝道決議の背景にはそういう切実なものがあったと思います。

しかし、だから伝道しなければならないというつもりはありません。伝道するということは主からゆだねられた使命であり、伝道そのものが教会を教会として生かしめることだから教会は伝道をします。いよいよ経済的に危ないから伝道をする、そういうものではないと思います。伝道すると困難に直面します。失敗もします。しかし多くの失敗や挫折の中から救われる人が与えられる。その全ての経験が教会の命になると思います。主から委託された教会の働きをすることによって、たとえそれが困難であったとしても、失敗が多いものであったとしても、教会はそれで生きるのです。「マルコによる福音書」の最後のところで「主は彼らとともに働き、彼らの語る言葉が真実であることをそれに伴うしるしによってはっきりと表された」と書かれています。弟子たちが出かけていって一生懸命伝道する時に、キリストと一緒に働いて、それに伴うしるしをもって弟子たちの言葉が確かであることをお示しになった。そのことを知ることが教会の命になります。それを知らないで教会は生きることが出来ません。その伝道の労苦なしには教会は自分の命を失うのだと思います。

さてこの30年の紛争期を、山北副議長は「30年戦争」とおっしゃいます。その通りですね。この30年の間に教団の中で使われるようになったもう一つの言葉、それは「対話」です。「対話」しなければならない、「対話」路線。これ

が教団の路線だというわけです。これは、戸田伊助議長（当時）が主唱した言葉であったと思います。つまり、教団が前進するためには「対話」して人の意見に耳を傾けなければならないというわけです。自分が変えられなければならないというわけです。もっといえば、教会の伝統や古い信念にとらわれずに、率直に人の意見に耳を傾けよう、というわけです。当時私は教区議長として常議員会に出席しておりました。問題提起者の方が「対話路線」ということを言うのです。ラディカルな意見を持った方が「教団は対話をするのだ」ということを申しました。そうした人々が人の意見を聞いて変えられる場面に出くわしたことは、一度も見たことがありません。彼らは人に向かって「対話しろ、自分を変えろ」というのです。もっと柔軟になれ、というのです。この「対話」路線が暴力を容認した中で進められたことの中に、その真意が現れていると思います。教団総会の怒号、ヤジ。気に入らない意見を言った者の前で威嚇する行為。常議員会では議長席に押し掛けて議事を中断させる。これらは教団の常の姿でありました。今でも時々あります。常の姿ではなくなりましたが。

私にとって非常に印象的な場面がありました。ある常議員会の冒頭に書記が、要求陪席を採決する時に、有名な S という人を「要求陪席、S さん」と言った時、彼は烈火のごとく怒って書記の前に行き、書記の机のものを全部ひっくり返してしまいました。なぜ怒ったか。「自分は要求してここにいるのではない。自分は教団に必要とされ、要請されてここにいるのだ」。要請陪席だ、というのです。当時教団では「あの方は教団問題に関わっているから議論に欠かせない人だ」と言って、教師問題とか万博問題とか合同問題に関わっている人を招かなければならないと言い、いつも彼らは「要請されて」来ていました。4, 5 人です。そして教団が宿泊費や交通費を出していたのです。それで彼（S 氏）は烈火のごとく怒ったのです。そういう人たちは常議員よりも常議員会に長期にわたって出ていたのです。その他、暴力的なことには枚挙にいとまがありませんが、そのような暴力も主張だというのが「対話」路線でした。本人がそう言うものではありません。他の人がそう言うのです。「彼がああしたのには主張があるはずだから聞かなければならない」。私には分かりません。

## 対話路線を越えて

関学で、ナイフ事件がありました後に、南大阪教会で常議員会がありました。そのときに S 氏がやってきました。その時に教団新報の記者を殴るということもありました。その時、ナイフ事件について諸教会から深刻な思いを持って、「教団はこのままでいいのか」という思いを持ってたくさんの人が傍聴に来ていました。その時にある教区長が「S さんにあそこまでさせてしまった、させざるをえなくしてしまったことを私たちが恥じなければならない」と言ったのです。何を言うのだ、と思いました。「対話」路線もきわまった、という気がしました。私はその発言を聞いた時に本当にがっくり来ました。なんでも彼（S 氏）のすることには解釈が入れられます。本人は決して言いません。

現在の私ども三役が選ばれて初めてにしたことは、S 氏他数名の要請陪席をしない、ということでした。教団の問題は誰かが担っているなんていうことはあり得ない。意見が違っているとしても、教団の問題は教団の全ての人たちがいろいろな形で担っているのではないかと。そう言ってその方々の要請陪席をやめました。それをやるのが私たちの仕事の最初の事柄でありました。「対話」というのは「話せば分かる」ということでしょう。しかし私たちはそれぞれの形で教会形成をしています。それぞれの伝統を受け継いだ中で教会形成をして、教会はそこで生きているのです。話せば、そこでああそうだ、なるほどそうかと簡単に納得出来るものではないと思います。対話はしなければならないかも知れないが、腰の据わった厳しい対話をしてしなければならないと思います。なぜならこれは私とあなたの対話ではなくて、教会と教会の対話だからです。私たちはそれぞれの伝統をもった教会の中で、生きてきた人間です。教会と教会の対話はそれほど簡単に分かたり分かれたりするものではないと思います。教会の存在と存在のかかった対話、それを避けることは出来ないと思います。教団の未来を開くために、そういう対話こそを私たちは今こそしなければならないと思います。互いに自分の足元を踏みしめた対話をしてしなければならない。信仰告白、教会論、そういうところをしっかりと押さえた対話を私たちはしなければならないと思います。そしてそれは決して簡単なものであってはならないと思います。教団の対話というものはあまりにも上滑りだったと思います。こ

の30年、教団を混乱させてきたのはあまりにも物わかりのいい人達でありました。どんなに進歩的で先鋭な意見や聖書解釈が出てきても、すぐに受け入れてしまうのです。分かるのです。分かっちゃうのです。「なるほど、それはよく分かる」、と。私には分からないのですが、すぐに分かっちゃう人がいるのです。許容範囲があまりにも広い。伝統を生きてきた教会につながっておられるのならばそんなに簡単に分かるはずがない、そのことが分かってしまうのです。柔軟だけれどもあまりにも柔軟すぎる。そういう人々がある意味で教団の混乱を深めてきたのではないかと考えています。分からないことを「分からない」と言うところから対話は始まると思います。いや、そこからしか対話というものは始まらないと思います。すぐに分かってしまったら対話をする必要はないのです。分からない。自分の立っている場所から考えたら分からない。そこから本当の対話は、あるとしたら、始まると思うのです。30年間、教団は本当に不幸でした。ある意味でずたずたにされてきました。しかしそれはまた合同教会としての教団が根本的な問題を避けてきた、その結果ではないかと思っています。そこで取り組まないで、他のところで一致しようとしてきた。

今、私たちは合同教会として前進するスタートラインにようやく立てたように思います。この混乱のおかげで、問題がどのあたりにあるのかもかなりくつきり分かってきました。困難だけれどもここから始めるほかない、この場所から始めるほかない。幸い、伝道も行き詰まっています。教会のことを本当に切実に考えざるを得ない。日本基督教団が教会としてこの21世紀をどう生き抜けるのか、そのことを私達は本当に考えざるを得ないところに立たされていると思います。そういう意味で私は今、残念ながらバラ色の未来を教団に関して描くことは出来ません。出来ませんが、この出発点をみんなで一緒に歩き始めていただきたいとアピールしたいと思います。ここからしか本当の始まりはない。教会と教会の存在をかけた突き合わせが出来る出発点に私たちはようやくたどり着いたように思います。それがあの、「教団は21世紀に伝道する」という決意表明であり、「青年伝道に力を尽くす」という決議であったように思います。

現在教団が抱えている問題の一つに、教師検定試験の基準の問題があります。

## 対話路線を越えて

「さまざまな立場の切り捨てが起こらないように、試験の準備に取り組む」（第18回教団総会期常議員会議決）。その時紛争の為に試験が出来なかった。だから、さまざまな立場を皆が受け入れて、切り捨てない形で試験の準備に入らなければ試験出来ない。そういう議決がなされました。しかしこれはあまりにもひどい。全部受け入れちゃうわけですから、試験する必要がほとんどないわけです。それで、第5回の常議員会で「教団信仰告白を基準として試験を行う」という決議を行いました。これは、法を専攻していらっしゃる方に聞きますと、「前のものを克服する形で出された後のものが有効になる」と言います。しかし教団はある意味で非常に苦勞しながら難解な解釈を付しての二つを緊張関係にあるものと見なして試験をしてきました。しかしどう考えてもこれは、たとえばよその、外国に持って行って「この二つの基準で試験をやっています」と言ったとしても、頭が混乱して理解してもらえないと思います。

これは今までの日本基督教団を象徴してきた課題であると思います。これを何とかしなければならないと思います。もちろん教団は合同教会です。幅があることは確かです。解釈の幅は認めるけれども、しかしこの教団信仰告白を基準として試験をするという形を是非作りたいと私は願っています。一つの文章に是非したいと願っています。それが教団の大きなベースを、お互いに歩み寄る大きなベースを作り出す大切な一歩ではないかと思います。一つのキリスト教団が「どういう教師を作り出すか」ということは、大変大事なことであります。そしてそこに教団の命というものはかかると思います。そのベースとして、基準はよく分からないようなものではないかと思います。この基準を、多くの幅を認めつつも、しかし「日本基督教団の信仰告白を基準として試験をする」という、最後はそういう一文で終わるようなものを考えたいと願っています。それが、教団が信頼をもってお互いに歩み出す、そういう一歩だと思います。まだまだこれからの道は本当に遠いと思います。しかし私は決して希望を失ってはいません。なぜならば、キリストの教会を信じるということがあるからです。キリストの教会というものは、生きているものだと思います。キリストが教会の中に生きてくださるのだから。困難だけれども生きていく。そして、希

望を持って教団の問題に取り組む方が勝つ，と言うのは変ですが，希望を持って取り組む者が教団を形成していくことになるのだ，と私は思っています。みなさんが本当に一緒に教団の問題を考え，祈り，さまざまな厳しい意見を言ってくださって，教団を前進させていただきたいと心から願い，私の話を終わらせていただきたいと思います。

(おじま せいし)